全部終わった世界で……

大月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
全部終わった世界で……

【Ｎコード】
Ｎ０９５３Ｌ

【作者名】
大月

【あらすじ】
村沢静也は普通の高校生だ。だが彼は周辺の人々には「天才」、「神童」などと呼ばれた。生まれながらにあらゆる技術を模倣できる器用さに、天賦の運動能力を持っていた彼に実質不可能は無かった。そんな彼の日常は、突然終わりを告げる。そして何も分からないままに世界を救うチートとしか言えないような勇者となる。そこは、まさにＲＰＧゲームの中のような世界で……そこには冒険があるはずだった、のだが……全ては終わり、世界には平和が訪れていた。

プロローグ

暖かい日だった。
桜は葉桜に変わり、残った花びらもひらり、ひらりと舞い落ちている。
そんな日、のどかで平和。俺はいつもどおり、親友の加藤翔梧(かとうしょうご)とともに学校からの帰り道を歩いている。
俺は村沢静也(むらさわしずや)。
普通の高校生だ。

だが、そう言うと、大抵「いや、普通じゃねぇよ」や、「お前が普通なら俺はどうなる？」的なことを言われる。
周りから俺は、どうも天才だと思われている。違うのに。
本当の天才は、俺の横を歩いているというのに。

良く俺たちは「天才コンビ」だとか言われる。たまにこいつらはできているとか、無茶苦茶言う奴もいるが、そういう事はないと先に言っておく。

「もう、夏か……」

「まだ5月だけど。そうは思えない暑さだよな」

「少し前はまだ肌寒かったのに」

なんということもない、くだらない話をしながら、歩いていく。

そして交差点までやってきた。ここで、俺と翔梧は別れ、残りは

俺は1人で家までの道を歩いていく。

照りつける太陽の日差し。

汗がにじみ出ている。帰ったら、まずシャワーだな。そんでその後は……特にやることもねぇし、寝るか……

そんなことを考えながら歩いていた。

――そこで、世界が終わった

どれだけ時間がたったのだろうか。全く見当がつかない。

もしかしたら、あの時の次の瞬間であるかもしれない。だが１００年以上が経っているかも知れない。

そもそも、俺は生きているのだろうか。死んでいるとしたら、ここは死後の世界なのだろうか。逆に生きているとするならば、ここはどこだ？

体は存在しない。

ただ青の空間。深海を思い浮かべるような世界。まぁ実際の深海は真っ暗で光なんか無いけど、とにかく深い青の世界だ。

俺の意識は水に浮かんでいる、いや、溶け込んでいるようにふわふわと漂っている。

記憶も、欠けている。まず、何があった？

俺の最新の記憶は、学校の帰り、翔梧と2人で歩いていて、そして分かれた。その後すぐ、

――俺の世界は終わった……

「村沢静也よ」

――俺の名前を呼ぶ声がする。

「世界を、救え」

――はい？

何だこの声は。まぁ神様？　だろうか。
俺は声を出せないから確認のしようも無い。

「力を、与える。世界を救い出せるだけの力を」

――話が見えない……

「これから、お前はある世界に降り立つ。そこを、救え。お前は、勇者だ。村沢静也」

深い青だった世界に、光が差し込む。
あらゆる場所から差し込んだ光は、青を白で塗りつぶしていく。
水に溶け込んでいた、俺の意識も光に塗りつぶされていった。

――どこだ、ここは。
俺は、翔梧と一緒に学校から帰っていて、そして変な場所に連れ

て行かれて……

「異世界、か？　なんだよそれ」

声が出た。当然のことなのだが、久しく感じられる。

俺にはしっかりと、地面を踏む体がある。

辺りは、草原。青々とした草、遠くを見れば森。大自然の中、という感じだ。

晴天、そして空を見上げると、ひらりひらりと、落ちてくる紙切れがある。こんな大自然の中で……

俺はそれを掴む。紙には文字が書かれていた。日本語のようで、読むことができる。

「能力の説明？　これは俺に宛てられたものか？」

内容は、シンプルだが、シンプルすぎて意味不明だ。

「『お前には、チートとしか言えないような力が備わっている』。なんだこりゃ。やけに砕けた文章だな……」

さらに文章はこう続く。

『勇者、村沢静也にはこれらの力が備わった。

・魔力無限

・超能力

・鬼神の身体能力

まず、魔力ってなんだよ。

そして、超能力ってなんだよ。

あと、鬼神って誰だよ。

まぁ、いいか。

とりあえず、なんだ、暇だ。だから世界でも救うか。

現状よく分からないままに、俺の異世界？　の勇者生活が始まることになってしまった。

プロローグ2

世界が終わり、始まったあの日。
そこから１４日。元の世界の感覚だと２週間が流れた。
最初はさすがに戸惑いはしたが、この２週間で大体の世界の仕組みは把握できた。そして、俺に備わったチートとしか言えないような力とやらも把握できた。
俺の能力は、知れば知るほど、まさにチートとしか言いようが無い。

まず、この世界には魔法というものがあった。
これにはとても驚いた。

そして魔法というのは、どうやらイメージで使うという実に曖昧なもののようだった。

それでやってみたところ、山を一つ焼き尽くしてしまった。

そして超能力。
これもイメージで使うという実に曖昧なものだが、魔法よりも使い勝手が良かった。
魔法は、魔力を、炎に～とか考える必要があるが、超能力ならあれを動かそうというイメージで念力が発動し、どこかに行こうとすれば瞬間移動も使えた。

鬼神、というのは分からないが、とりあえず体がすごく速く動いた。

俺は今、ギルドという建物の中にいる。

どうもこの世界は、ゲームの中そのもののようなのだ。あちこちにはダンジョンが存在し、そこにはモンスターがいる。
そしてダンジョンを攻略する人のことを、まとめてクエスターというらしい。

ギルドには、様々なダンジョンの情報が届いている。
その中から、ダンジョンを探す。俺もこの世界で、とりあえずクエスターとしてやっていくことにしたのだ。

――なぜ、こうなっているか。
俺は、世界を救うはずだったのに。
これは、俺がこの世界にやってきてすぐの話だ。

――異世界にやってきた俺は、大自然の中にいた。
まだ右も左も分からないが、とにかく人のいるところを探して、町を見つけ出した。

「号外！　号外だよー！」

町では新聞だろうか、そんな感じの紙が配られていた。
一枚ものの紙だ。それにはとんでもないことが、いや、まぁそれでいいんだけど……

『魔王、討ち取ったり！』

俺が倒すはずだった魔王はすでに誰かに撃ち滅ぼされ、俺が救う

はずだった世界はすでに誰かの手で平和になっていたのだ。
辺りからは「これで世界は平和になる」といった言葉が聞こえてくる。
それはいいことだ。
でも、俺は、何のためにこの世界にやってきたんだろう。
世界を救う使命を受けた勇者。それが俺、だと思ったりしていたけど、そうじゃないらしい。
でも神様は世界を救えと……
頭がこんがらがってきた。
けど、まぁ、いいか。
世界を平和にするという目的は達成されているから、俺は元の世界に帰れるのだろう。
そう考えていた。

そして、3日がたった。
俺は元の世界に帰れずにいる。俺をこの世界につれてきたと思われる、神様も現れないし、声が掛けられることも無い。
なぜかポケットに入っていた見たことも無いコインのおかげでとりあえず過ごせているが、このままでは一文無しになるのもそう遠くは無いだろう。
俺は危機感を抱き始めていた。
それはこの生活が続けばどうなるか、ということに対する懸念ともう一つ。

――俺は、帰れるのか？
という、現状考えられる最悪のパターンに対する懸念だ。
俺は今、ギルドにいる。
情報を得るんだ。俺は1人の男に話しかけた。
「なあ、ちょっといいか？」
「なんでしょう？」
「魔王って、もう1人くらいいねぇの？」
「あ、あなた！　信じられないことを言いますね！　あんなのがもう1人いたら、世界は終わっていますよ！」
「そ、そうか。魔王ってやべぇのな……」
いろいろ情報を集めてはみたが、もう1人の魔王の存在についてはそれらしい情報は得られなかった。
魔王というのは、第2、第3と存在するものだと思っていたが、この世界に裏ボスはいないらしい。

さらに4日経った。この世界にやってきてから7日。丁度1週間がたった。
俺はそろそろ元の世界に帰ることを諦め始めていた。

と言っても元の世界への未練を断ち切ったわけじゃない。未練たらたらだ。今すぐ家族、友人に会いたい。
だが、今すぐ変えるということが多分不可能であるということは悟った。

勝手な憶測だが、来たんだから帰れない事は無いだろう。
時間も、できれば早くすませたいが、それなりにはある。時間をかけて、元の世界に変える手段を見つけよう。そういう結論に俺は至った。

とにかく、俺はこの世界で生きていくために、自分の力とやらを確かめることにした。
確か、魔力無限、超能力、そして鬼神の身体能力。

俺は安全な、とりあえず、俺が最初にこの世界にやってきた時にいた、あの草原へと向かった。

「魔法、魔法……なんか、ＦＦとかＤＱみたいな感じで……」

アバウトにだが、炎を思い浮かべて、それを目の前に……

「ファイアァアア！」

俺の目の前に、巨大な火の玉が出現した。
それはどんどん大きくなり、俺の体すら飲み込もうとする。直感的に、このままでは危ない気がした。
だがこれは俺が生み出した魔法の火の玉。だった俺の制御を受けるはず。
だから俺は、こいつを前方に弾き飛ばした。
――結果、前方にあった森、さらにその奥の山は全焼した。

そして、今に至る。
この世界の人の、ほとんどはクエスターと呼ばれ、日夜広義のダンジョンと呼ばれるモンスターの巣窟で戦い続けている。

クエスター、というのは本当に広い範囲の人々を表す単語らしく、そのクエスターの中にはさらに細かく職業が存在する。
まぁ、ソードマン、とかウィザード、とか、まさにＲＰＧなあれ。俺だと勇者になってもおかしくなさそうだけど、魔王を倒さないのに勇者を名乗るなんてのはおこがましい事この上ない。

剣を振るえばソードマン、魔法を使えばウィザードなのだが、この辺はどうも自称のようだ。

さて、今日から俺は新米クエスター。
だからとりあえず……

「ここでいっか……おじさん、場所教えてくれ」

「え、ちょ、え？　そこは危険度Ａの……」

「いいからいいから」

「でも、１人で行くのかい？」

「１人ので行くのだよ、俺友達いないから」

ギルドのおじさんは、なんだかうんうんうねりながら、渋々といった感じで俺に場所を説明してくれた。

真北に一直線。

『紅い森』。そこは、歴戦のクエスターすらも簡単に飲み込み、さらに森はクエスターたちの血で紅く染まっているという……

0章：新しい世界

俺は『紅い森』にたどり着いた。
この世界では、モンスターの住処を抗議にダンジョンという。そこが迷宮じゃなくてもダンジョンだ。
チートとはいえ、完全に扱えるわけではない。だから一応、町で剣を1本手に入れて腰に差してみている。両刃の剣。どうせなら刀が良かったけど、無いんだからしょうがない。

この森、名前は紅い森なのに、葉っぱも、地面の草も、青々としている。どこにも赤なんか見あたらない。まぁ、噂とかだろう。
つか普通に考えて、人の血液くらいで木々や草が紅に染まるわけが無い。何人死んでんだよ。しかも鮮血ぶちまけて。

「……ん、敵か」

鬼神の身体能力というのはとにかくすごい。
俺は背後から迫っていた、まだ１００メートルは離れた位置にいるであろう敵の存在に直感的に気付くことができた。
振り返り、剣を抜く。

「き、気持ち悪ッ！」

巨大なムカデがこちらに迫っていた。
剣で斬り裂くつもりだったけど、無理すぎる。体液とかかかりそうで嫌だし。
高速でこっちに直進してくるムカデに、左手を向ける。そして意識を集中する。

――ムカデを、掴む

「ギ、ギィイ」

「ふぅ、できたできた」

ムカデの動きが止まる。

今、ムカデは空間に発生している見えない俺の力にその身を拘束されている。

多分、このまま俺が左手を握り締めれば潰すこともできる。けど、それはちょっと無理。だから、そのまま俺は左手を斜め左上に振る。

ムカデの体が地面から離れて、宙を舞っていった。

「便利なもんだなぁ」

さらに進んでいく。

森はどこまで進んでも、深い緑。やっぱり紅い森とは言っても、やっぱり森は緑色。当たり前といえば当たり前か。

俺は分かれ道にぶつかった。

まぁ、強引に進めば直進できるけど、服も汚れそうだし、変な虫とかに刺されそうだからパス。右か左かなんだけど、どうも左からはすごく大きな気配を感じる……

だから、左だ。

俺は左の道へと足を進めた。

するとすぐに敵にぶつかる。巨大な蟷螂のようなモンスターだ。

剣を抜き、敵が反応する前に両断する。

何が起きたかも分からないままに、蟷螂の体は真っ二つになり、地面に崩れ落ちた。
なんだかよく分からない黄緑色っぽい体液が地面に広がっていく。

……吐き気が。

「さっさと行こう」

俺は蟷螂の体液を避けながら、さらに森を進んでいく。

奥に行けば奥に行くほど、道は狭くなる。
どんどん木は大きくなっていく。
途中までは、木々の隙間から差し込んでいた日光も、大分奥まで進んだのか、かなり少なくなり、夜中のようだ。

背後に、気配を感じる。

巨大な蜘蛛だ。

背後とはいっても、１００メートルほど離れているから、無視してもいいかもしれない。走れば逃げ切れる。だが明確な敵意がびしびし飛んでくる。
振り返り、手のひらを蜘蛛に向ける。

魔法は一番扱いが難しい。
だがこの世界で最も一般的な術というのは、魔力を用いた魔術らしい。
おそらく俺の超能力なんかは、かなり特異。それはそれで有名になるかもしれないが、この世界で生きる限り、魔法の習得も必要だ

ろう。

まず魔力を集める。

これは簡単だった。手のひらに、何か暖かいものが集まっていくのが分かる。

そしてこれを、イメージで変換する。

これも簡単だ。ただここは森の中だから、火はやめて、風に変える。

そして問題発生。俺は力加減というのが分からない。

なにせ魔力は無限。仮に限界が１０００とかだったら、そこから考えて加減もできるかもしれないけど、上限無しだから加減のしようが無い。

「薙ぎ倒せ！」

俺の手のひらから、魔力で作られた風邪の弾丸が高速射出される。

直径、多分１０メートルくらいはある巨大な圧縮空気の弾丸は、地面を抉り、木々をらくらく根元からへし折り、巻き込みながら直進し、蜘蛛は踏まれた蟻のようにぷちっと潰れてしまった。

分からないなぁ、加減。

しかし、明るくなった。うん、結果オーライ。

それからしばらく、俺には森のモンスターは近寄らなかった。

自然の勘というやつだろうか。俺の今の一撃は、森中のモンスターたちに本能の恐怖を植えつけるのに十分な威力を持っていたようだ。

そこから俺は、超危険とギルドのおっさんに念を押されたダンジョン『紅い森』をフリーパスで進んでいく。
気配が読めるから、周りのモンスターが退いていくのがよく分かる。
むしろ俺が魔王みたいだ。

――いや、そうでもないらしい。

森の奥、ここからはまだ少し距離はあるが、それなりに遠くても伝わってくる気配。そいつは俺に臆することも無い。
ダンジョンの、主というやつだろうか。
しかしガンガン敵意は放たれているけど、それはこちらに向けられてはいない。

誰かいるのか？
まぁいいけど。

俺は巨大な気配を目標地点にして、歩き始めた。

そして少し歩いた。
すると、日光が差し込んできた。

「暖かい……」

正直、さっきまで肌寒かったが、この辺りは暖かい。やはり日光が届くだけで違うんだな。

それを覆っていた葉っぱに隙間がたくさんある。

……ただ、なんか変なものがある。

でかい、タンポポのような花がある。そいつは、くりくりとした目を持っていて実にシュールだ。
風を受けてごつい頭を揺らしているが、正直可愛くねぇぜ。
しかも一つじゃないから最悪だ。

「ガウ！」

さらに鳴きやがった。
ライオンにも見えなくない。
まぁタンポポはダンデライオンというけど。

「まぁ、害は無さそうだし……放っておくか」

俺は無視して歩き始めた。
気配はどんどん近くなっていく。そいつは依然として敵意むき出しで、暴れているのだろうか。まだよく分からないが、そこそこ大きなモンスターのようだ。

さらに進む。

気配は、もう目の前だ。
そこには、信じられない光景が広がっていた。

「……」

言葉を失った。

青々とした、薄暗い広大な森の中、この辺りだけが見事に紅葉しているのだ。
赤や黄色の葉がは、日光を美しく反射し、さらに気温さえも上げ

てくれているようで、とても暖かく感じられる。
ここはまさに『紅い森』だ。

そしてひらひらと、美しく舞う色とりどりの葉っぱの下では、真っ赤な体を持つ巨大なヘラクレスオオカブトムシにしか見えないモンスターが、敵意むき出しで、1人の少女を突き殺そうとしていた。

「……綺麗だ」

「ちょぉっと!? あの! これ見えない!?」

「これほど綺麗な紅葉は、元の世界じゃ拝めなかったな」

「あー! 無視!? 無視するの!? か弱い女の子を!? きゃあああ! 殺される! お願い助けて! お願いしますからぁ!」

……あぁ、忘れてた。

まぁ、ついでに助けてやるか。

俺は剣を抜き、一気にダッシュし、少女とヘラクレスオオカブトムシの間に割り込む。そして少女に向けられていた、赤い巨大な角を弾く。
赤いヘラクレスオオカブトムシは、大きく仰け反り、そしてこちらを睨みつける。
どうやらこのモンスターの敵意の対照は俺に移ったらしい。

今度は俺に角が突きこまれる。俺はそれを素手で受け止め、そのまま受け流す。

赤く巨大な体が、地面を転がりながら俺の左後方に流れる。
俺もそれに対応し、すぐに敵と対峙する。
……どうも、このなまくらじゃ切れそうにも無い。
一番確実に、安全に、巻き込んでしまわない手段は超能力だな。
もちろん巻き込んじゃいけないものは、この美しい紅葉だ。
左手を敵に向け、イメージ。意識を集中する。
――角を、掴む。
ヘラクレスオオカブトムシの動きが止まる。
このまま左手を上げる。
その動きにあわせて、巨大な角が持ち上がり、それに引っ張られてその体も浮き上がり、徐々に高く、森のどの木よりも高い位置まで浮上した。
そして左手を真横に振るう。
ヘラクレスオオカブトの体が高速で左の方向に動き、そのまま森の向こうへと消えていった。まぁ何かしらどこかに迷惑掛かるかもしれないけど、まぁ、いいか。
「え、え？　今の何？」
少女が俺のほうへと走ってくる。
「まぁ、一応、大丈夫か？」

「一応って何よ」

「いやだって、この紅葉を守るついでだったから一応」

剣をしまいながら答える。少女は実に不服そうだったが、実際にそうなんだから仕方が無い。

そもそもここは、一応危険なダンジョンだ。

そんな場所の、こんな奥地で、主っぽい巨大なモンスターとたった1人で対峙していた少女が、ごくごく普通の女の子だ、なんていうわけが無い。

クエスターである事は間違いない。

ショートヘアで、服装はかなり軽装。動きやすさを追求した結果なのか、露出も多く傷は負いやすそうだ。

武器は、パッと見見当たらない。まぁ、素手で戦うのかな。

それで『か弱い女の子』なんだからお笑いだぜ。

「なによ、文句あるの！？」

少女は不服を通り過ぎて怒ってすらいるように見える。うーん、鬼神の身体能力では、人の感情を読み取るのは無理みたいだな。

まぁ、それはそれで、その方がいいだろう。

他人の心なんか分かりたくない。

「いや、別に」

「ふん、あっそう」

「……一応、ついでだったとはいえ、助けてくれた恩人にその態度は無いだろ」

「……っ！　……た、確かにその通りね。感謝するわ」

「……気持ち悪い笑うな」

「き、気持ち悪い！？　女の子になんてこと言うのよ！」

……だってよ、さっきまであんな不機嫌そうだった女が、急ににっこりすんなよ。しかも、なんか表情引きつってたし。

「笑うなら、素直に笑いたい時に笑え」

「むっ、何よそれ。偉そうに」

「お前より年上だからな」

「私の年知らないでしょ！」

「知らないけど、俺よりは下だろ」

顔はどう見ても１３、１４、まぁギリギリ１５かもしれないが、俺と同い年の１７より上には見えない。こんなちびっ子の女子高生は見たこと無いからな。

それに……身長、１４０……あるか？　無いだろうな。

「じゃああんた！　何歳なのよ！？」

「１７」

「私は19年生きてるの！」

「えぇ！？　ま、まじかよ……世界は広いな……いやここ別の世界だけど……」

「？　何言ってんの？」

「いや、忘れろ。気にするな」

……まぁ、もう、帰ろうかな。

「ど、どこ行くの？」

「帰る」

「ちょっと待ってよ！」

「なに」

立ち止まり振り返る。

少女、いやちびっ子は、不服そうな顔でも怒った顔でも、ぎこちない笑みを浮かべてもいない。いたって普通の顔、だが少し強張っているかな。

さて、何を言い出す、もしくは何をするつもりか。

「助けてもらったんだから、お礼がしたい。というわけで、私のホームまで来てちょうだい」

……ホーム、というのはこいつの家、というよりは、クエスター同士でパーティを組んでいる拠点という意味だろうな。
そこで俺にお礼をしたいと。
そういうわけか。

「……じゃぁ、そうさせてもらうか」

「ほんと！？　やった！」

少女は自然な笑みを作ると、その場で一回転して飛び跳ねた。
とても１９歳の女性には見えない派手なアクションの後に、こちらに向き直り握手を求めてきた。なんか知らんが、応えておくことにしよう。

「私はリズベル。リズって呼んでね」

「俺は、静也（しずや）。呼び方はなんでもいい」

俺は妙に上機嫌なリズと並んで、紅葉に背を向けて森を引き返し始めた。

俺と野生と少女

名残惜しい。
この紅葉。携帯電話がここにあれば、携帯のカメラで撮影できた。というか、元の世界だったならば今すぐ家にカメラを取りに帰っている。そして撮る。

それぐらいだ。
なんと綺麗な、それほどの美しい紅葉。
だが遠ざかっていく。

まぁ、いいけど。

帰り道。
森にはモンスターが相当数いる。それは、俺の鬼神の身体能力で研ぎ澄まされている感覚で常に捉えられている。
まるで、王族が歩く道を作るためにひらけていく庶民のように、一斉に散っていき、俺たちの通る道には気配はまるで無い。

「……シズヤ。モンスター払いの魔法でも使ってる？」

「ま、そんなとこだ」

本当は、俺の巨大すぎるチート勇者の力に、自然そのものが脅えているのだけど、それを自分で言うのもなんだかなぁ。

さらに進んでいく。もう振り返っても、ほとんど紅葉を確認する事はできない。

……前方、かなり遠くだが、そこからものすごい殺気が飛んでくるのが分かる。
まだ相当離れているが、そうとう怒ってるな。
どうやら死んでいなかったようだ。あの赤いヘラクレスオオカブトムシ。

俺は剣を一応抜いた。
すぐ隣で、気配など全く感じていないであろうリズが体をビクッと震わせ、俺を見た。

「あのカブトムシが帰ってくるな……」

「ホーントラストが！？」

そんな名前があったのか。

「とりあえず、まだ遠いけどこっちに向かってる」

「か、勝てる？」

「負けは無いな」

「じゃあ、あいつの角がほしい」

「あー……まぁ、いいけど。じゃあ根元からポッキリへし折ってやるよ」

羽音が聞こえてくる。
あと少し、こっちに突っ込んできたら、一撃だ。

魔力を集中する。今度は最初から手加減なんか考えない。
魔力を風に、そしてなまくらにその魔力を纏わせる。圧縮するのではなく、極限まで鋭く、研ぎ澄ますように。
狙いは角、そして角を落としたらそのまま体も真っ二つにしてやる。

羽音がさらに大きくなり、漸く敵の姿が視認できる距離に現れた。赤い体は、日光を反射して輝いている。
どうやら、こちらの位置を把握できているようだ。
太く長い角が、一直線にこちらに向けて突っ込んでくる。

「き、来たぁあああ！」

ホーントラストは目と鼻の先。

体の位置を僅かにずらし、角の直撃を避ける。
赤い角は、俺のすぐ横を通過していこうとする。

俺はそれを切断すべく、風を纏った剣を縦に振り下ろした。

音も無く、まるで豆腐を包丁で切るように、剣はすっと角を通過する。
さらに返す刃でホーントラストの巨大な胴体も真っ二つに斬り裂く。

まず、ドン、と地面にホーントラスの角が落下した。そして次に、両断されたホーントラストの体が崩れ、地面をすべるように森の多くへと消えていく。

「おしまい」

地面に落ちている角を右手で掴み、持ち上げてリズに軽く投げて渡す。

「ほい、角」

「あ、アホかぁああ！」

リズは両手でそれを受け止めたが、角が重すぎたのか、角に押しつぶされる形で地面に崩れた。

なんだ、非力だな。

仕方が無いから俺が角を持ち上げる。

片手で簡単に持ち上がるのは、やはり鬼神の身体能力のおかげか。

「お前、1人でもてないものを一体どうやって持ち帰るつもりだったんだよ」

「引っ張って行くに決まってるでしょ！？　こんなの片手で持ち上げられる怪力バカ見たの初めてよ！」

リズは怒りを露にしていた。まぁ、そういうものみたいだな。

角を木に引っ掛けないように、角を立てて持ち、森の中を進んでいく。

しばらく歩くと、いきなりリズが走り出した。

……ここは、俺が来る時に通った道。なぜ分かるかというと、少し前方は木がごっそり無くなっていて、日光が射し込むを超えて普通に当たっていて明るい。

どう見ても自然の傷跡ではない。
俺が魔法でやっちまった後しか考えられないからだ。

「か、可愛いっ！」

「……お前、その気持ち悪いタンポポのことか？」

来る時にも発見した、タンポポ、なんだか目と口がついていてライオンみたいに鳴きやがる気持ち悪いとしか言いようが無い植物かどうかも疑わしい花だ。

「ガウ！　ガウ！」

「これね！　すっごい珍しいんだよ！」

「ああはいはい、そりゃ珍しいだろうな」

紛れも無い珍種だ。

「可愛いなぁ……」

リズは動く気配が無いから、俺はほっといて先に進むことにした。

しばらくすると、全速力でリズが追いついてきた。
なんだか相当慌てているようだ。

そしてそのリズの背後から、モンスターの気配。それも相当数……
なるほど。森の脅威であった俺から離れてしまったリズは、モンスターにとっては普通に標的になるわけだ。
しかし、ほんとに数は多いな。

よく振り切ったものだ。

「シズヤ！　あんたと離れた直後から、モンスターがどんどん沸いてくるんだけど！？」

「だから、俺はモンスター払いの魔法を使ってるから」

嘘なのだが、結果として同じだ。

リズが俺に近づくと、モンスターたちは近づいてこなくなる。だがどこかに散ってしまうわけではない。多分、俺に近づいてもギリギリ安全だと判断できた距離を保ちながら、リズが俺から離れるのを待っている、というところか。

……まぁ、言葉は通じないだろうから言わないけど、モンスターたちよ。

多分そこは超危険区域内だ。

安全圏は、少なくとも森の中には無い。

なんか、かっこよくあいつ等を追っ払う方法は無いかな。

魔法も超能力も、この距離だと確実に森も壊す。

……こいつ等が恐れているのは、俺のなんだ。気配か？　それとも無限の魔力か？

気配の範囲を広げる方法なんか知らないし、できるかも不明だけど、魔力をあたりに飛ばすことならできる。

よし、やろう。今すぐやろう。

魔力を、集中させずに、開放する。全方位へと放出。

――一気に気配が退いて行った。

「……なんか、森が静かになってない？」

あまりにも突然、森に静寂が訪れた。
何も音が無い。

「シズヤ、何したの？」

「魔法」

厳密には魔力を放出したのだが、これも魔法だろう。
感じられる俺の体の中の魔力っぽいものが減少する気配はない。
今も満ちている。

「ほんと、何者なのよ……そういえば職業は？」

「あ、そうだな。ソードマンでいいか」

「あんたどう見ても魔法の方が凄そうじゃない……」

そりゃ生まれてこの方、剣の修行なんかしたこと無かったから、
鬼神の身体能力とやらに任せて振り回してるだけだしな。
ならばウィザード、もしくはソーサラー？　魔法使いってなんて
いうんだろう。分からないけど、俺は魔法使いではありません。
まぁ、ソードマンでもないけど、戦闘モノのマンガとかのノリで
やってみただけだから、あれぐらいできたら上出来だろう。

「じゃあ、ランクは？」

「……なにそれ？」

「知らないの！？　あんたほんとにクエスター！？」

「改めて考えると、俺はクエスターじゃないかもな」

「どういう意味よ」

「剣も魔法も、２週間くらい前に身につけたからなぁ。モンスターも、ダンジョンも、このクエスターっていうのもほとんど知らないんだよ」

「……」

リズが目を見開いて、口をぽかんと開けていた。
ものすごく、驚いているというのが伝わってくる顔だ。

「たった２週間で、あれだけできるようになるの？　シズヤって天才！？」

「なんでだ。俺なんか天才じゃねぇよ」

「天才に決まってるわよ。仮に生まれつき魔力は持っていたのだとして、身体能力も生まれつきのものだとしても、あの戦いぶりは異常よ。歴戦のクエスターって感じだったわね」

デビュー戦なんだけどなぁ……
しかし、俺が天才なぁ。この世界でも勘違いされるのかよ。俺のはただの模倣、真似。剣は漫画から、魔法はまぁ直感だけど。

そういう意味じゃ俺はウィザードか。

まぁでもチート勇者だし、チーターだな。

「生まれつきでは、無いんだけどな」

「えぇー！？　じゃあこれだけの技術を全部２週間で！？」

「いや、神様がくれた」

「わ、分けわかんない……」

「俺も分からねぇ」

本当に、分からないことが多すぎる。

やはり俺は向こうでは死んだのか。もしくはこれは夢。しかしここが夢の中だとすると、俺は夢の中で眠り、夢を見ていたのか。

なんかおかしな話だ。

夢じゃない、俺は死んでいない、とすると……

やはり異世界。この世界の神様に勇者として呼ばれたというのが妥当か……

当然納得はできないけどな。

それか最悪、死後の世界――

それはやだな。死んだ爺さんに会えたりするものだとばかり思っていたのに、死後の世界はモンスターのいるＲＰＧみたいな世界というのは勘弁だ。

森を進む。

あ、行き止まりだ。

「不自然な行き止まりだな……」

土が盛り上がって、ドーム状の塊ができている。回り道すればいいわけだが、これはどう考えても自然の産物じゃない。

……いや、モンスターが作っていた場合はこれも自然の一部か？

中から気配を感じる。

どうやらかなり気配を殺しているようで、この距離までこなければはっきりとは感じ取ることができない。

何が出るか……

何も出なければ、スルーすればいいが。

――リズは興味津々らしい。

「うーん、なにかなぁ。モンスターの住処なのかなぁ」

「鋭いな。中から気配を感じる」

「す、凄いわね。そんなの分かるんだ……」

リズは身長に土の塊に近づき、手でゆっくりと触れた。

――気配が……

「リズ、中で何か動いたぞ」

「きゃぁああ！　って！　脅かさないでよ！」

「違う！　今すぐそれから離れ――」

俺が言い終わる前に、土の塊は崩れた。

そしてそこから姿を現したのは、巨大な蛇の頭。

獲物を待っていましたといわんばかりに、気配を全開にした大蛇は、その顎をいっぱいに広げ、そして――

「――リズ！」

――小さなリズの体を丸呑みにした。

想定外の速さ。野生の捕食能力、怖ろしいな。だが丸呑みにされたのは不幸中の幸いか……融かされる前に、あの蛇を八つ裂きにして助け出せる。

「今、助ける」

剣を抜き、俺は大蛇と対峙した。

大蛇はまだまだ食い足りないと、俺まで空気満々らしい。

だが、怖くねぇよ。

逃げられるのが最悪だったからな。

お前も、気配を潜めてないで、他の森の魔物と一緒にここから去るべきだったんだ。

手加減のできない力

大蛇がこちらに猛スピードで突っ込んでくる。
顎は閉じたまま、どうやらこれで俺を喰らうつもりは無いらしい。
まずは突進でこちらの動きを鈍らせようという考えだろうか。

かわすことはできる。
だがかわさない。手に持った剣を大蛇の眉間に突き刺す。

――が、刺さらない。

僅かに俺の体が押される。
しかし俺は退かない。だが蛇もかなりの力でこちらに押してくる。
なまくらの俺の剣は、大蛇の鱗を貫けない。そうなれば、間に挟まれる俺の剣にはかなりの負荷が掛かる。

案の定、俺の剣は中辺りでポッキリ折れてしまった。

つっかえ棒をなくした大蛇が一気にこちらに突っ込んでくる。俺は左に飛んでそれを避ける。

「堅い……。困ったな。安物とはいえ唯一の武器だったのに」

悠長に戦っている暇は無い。なにせ、リズの体がこいつの体内でいつドロドロになるか分からないからな。急ぐ必要がある。
そうなれば魔法か、超能力か――なのだが、これがまた不完全なのだ。

魔法は強すぎてリズまで傷つけかねない。

超能力はまだ念力と、瞬間移動しか完全じゃないからリズを助け出すことには直結しない。

……いや、武器はある。

こいつの体と同じく、俺の剣では切れなかった得物が。

そばに落ちている、『ホーントラスト』の角が。先端はそこそこ鋭いし、なにせ堅い。

こいつを切断した時のように、うまく魔法と合わせれば大蛇の鱗を斬り裂くことも容易いだろう。

そうと決まれば使おう。

大きな赤い角を片手で拾い、くるくると回す。よし、大丈夫。十分武器になる。

大蛇は、得体の知れない巨大な棒を振り回す俺に警戒を抱いたのか、じりじりと後退していく。

距離をとり、見極めながら戦うつもりか。

野性の本能か、しかしこいつは賢い蛇だ。敵の本性が知れない時にはまず距離を置く、できるならば身を隠す。

怒り狂い、ただ正面から挑み、俺に両断される末路を辿ったあのカブトムシに比べればこいつははるかに賢く、野性的だ。

だが、俺にはそうしている時間は無い。

――まず、一撃で命を貰おう。

「はぁっ！」

地面を蹴り、距離を詰める。

大蛇の体がそれに反応し僅かに動くが、鬼神の身体能力を前には遅すぎる。
両手で角を振り上げ、一気に大蛇の頭目掛けて振り下ろす。
「ギィィッ！？」
角は大蛇の鱗を切裂き、肉を切った。だが命を絶つところまではいかなかったらしい。
赤い血が傷口から吹き出し、俺の体にかかる。
大蛇は激痛を感じているのか、暴れ周り、木に頭をぶつけ静止した。
――死んだか？　いや、気配は消えていない。
……変な声が聞こえる。
大蛇の腹の中からだ。
直後、大蛇が狂ったように暴れ始めた。
小さな爆発音が響き、その腹を突き破るように何かが飛び出してくる。
――1人で出れたのか。
「うえぇー、汚いー……」
「べっとべとだな」
「ぐぅ……いきなり何かと思えば、蛇に食われるなんて何て屈辱……」

リズは全身に半透明の、実に気持ち悪い謎の液状の物質を被った状態で大蛇の腹を突き破って生還した。
まだ消化はされていないらしく、元気ではあるようだ。

「ギシャアアアアア！！」

獲物に腹を突き破られた大蛇は怒りと激痛で大暴れしている。
俺たちの姿も認識できていないらしく、巨大な体を森の木々にたたき付けて、太い木を根元からへし折っていく。

偶然、尻尾の一振りがこちらに飛んできた。

「シズヤ危ないっ！」

「大丈夫」

右手で軽く弾く。

すると大蛇は漸くこちらに気付き、俺を睨みつけた。
敵意をひしひしと感じられる。相当お怒りのようだが、一つの衝動に支配されたお前はもう何もできない。
まぁ、冷静だったとしても勝ちの目は無かったんだがなぁ……

少なくとも、危険と恐怖を感じとってこの場から逃げ去ろうとすることくらいはできただろうな。

魔力を体の中心から引っ張り出し、手のひらに集める。

イメージは、刃。斬り裂く、風の力。
手のひらの上にかまいたちを作り出す。

「切り裂け」

手を振るう。

手のひらから放たれたかまいたちは、巨大な刃になり、大蛇の体を簡単に切り裂いた。

そしてそのまま森を直進し、木々を切り倒しながら遠くまで消えていった。

うーん、加減難しいなぁ。

「ギ、ギィ？」

「……なんだ、まさか死んだことに気付いていないとか？」

大蛇はもう一度こちらに襲いかかろうとした。だがそれは叶わない。

切断された蛇の体は崩れ落ちた。

切断面から血があふれ、地面を赤で染める。

大蛇は己の死に気付き、その瞳に色を失った。

「じゃあ行こうか」

「えぇ～、まってよ……私全身べとべと……」

「命があっただけ良かったじゃないか」

「うぅ、それを言われると……でもこんな状態で皆に会えないよ」

謎の半透明の物質は、今でもリズの体にべっとりとまとわりついている。まぁほぼ無臭なのが唯一の救いだったかもしれないな。
衣服には僅かにでも溶解した様子は無い。
ほとんど溶かす力は無いのか、もしくはまだ胃酸などの危ない物質には触れていなかったのか。どちらにせよラッキーではある。
ただ、まぁ女の子をべとべとの状態で放置しておくのもなぁ。
――加減ができるかは分からないけど、勢いをつけなければいいか。
魔力を水に、流れも無く、ただ俺の手のひらから湧き出るように。
手のひらをリズのほうへと向ける。
リズは意味が分からないようで、首をかしげている。
「発動」
「なにが……えぇえええ!?」
俺の手のひらから、大河が反乱したような凄まじい水量の水が溢れ出し、水は勢いこそ無いものの軽々リズを巻き込んで森に広がっていった。
水は当然俺の方向へも迫るわけで……
超能力で、俺の体の周りをカバー。
なるほど、超能力はこういう使い方もできるな。
……忘れていた、水を止めよう。

水は幸い、俺が止めるようにイメージするとあっさり止まってくれた。でもこの水量。ちょっとした災害レベルだな。
やっちまった。リズは大丈夫だろうか。

森の中に……気配はある。しかし弱弱しいな。

そこに向かうことにした。
森の生態系は、一時的にものすごい被害を受けたかもしれない。
しかし、大いなる大自然がこの程度で壊れたりするはずも無い。
多分、再生力とかあるだろうし、俺が森からいなくなればモンスターも戻ってくるだろ。

――リズは、森のかなり出口に近い位置で漸く見つけることができた。

木の枝に引っ掛かって、リズは洗濯物のように干されていた。

「良かったな、綺麗になったみたいで」

「えぇそうね！　おかげで凄く綺麗になったわよ！」

「……怒ってんの？」

「怒ってない！」

リズは木から飛び降りた。
服はまだ大分湿っているようだ。

「乾かそうか？」

「遠慮させていただく……」

「そ、そうか」

――寒そうだ。俺の服も安物だけど、無いよりはいいだろう。俺は寒くないし、上着だけ貸してやることにする。

「着とけ」

「え？　悪いよ」

「気にすんな」

どうも、この世界に来てから寒いとか感じない。これも鬼神の身体能力あってこそか。我慢強いことだな。

森は抜けたし、後はリズのホームとやらまで行くだけか。

俺はリズについてのんびり歩き始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0953l/

全部終わった世界で……

2010年10月11日15時13分発行